

詩編 第118編 24節

「これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。」

雪模様となる予報が数日前から繰り返されている。車はスノータイヤで、または滑り止めのチェーンを用意するようにと注意を喚起する。歩行者には転倒や滑らないように靴を用意するよう勧める。停電の恐れがあるから備えをするようにと警告する。予報の段階から、緊急の備えをするよう促される。身の安全を保つためには、警戒は重要である。どのような気持ちで備えただろうか。

南国育ちの者にとっては一大事であろう。予報官の警告はかなり深刻なこととして聞こえただろう。案の定、雪害への備えのため道具を求めて外出する様子が放映される。その姿を見る人たちのなかには自分も用意しなくてはと出かけることになった人もいる。しかし、北国育ちにとっては日常的なこととして、あちこちの店に出向くような、特段うろたえるようなことはないだろう。

辺りは暗くなり、気温が低くなり、雨が続けている。夜が進むにつれていよいよ雪となるだろうか、と用心している。ところが、小雨の音が夜通し聞こえる。朝方の雪かもしれない。早朝カーテンを開き外に目をやる。小雨が落ちている。積雪予報が外れ、町はいつもの通り。